

第七回世界農村社会学会議に出席して

高橋 明善

七月二十五日、八月二日、第七回世界農村社会学會議がイタリア、ポローニアで開催されました。この會議に、私は、村研の推薦を経て學術會議より派遣され出席しました。日本からはほかに松田苑子・満田久義氏が出席されました。私は「日本の農業問題と農業家族の変動」、松田氏は「農村コミュニティにおける灌溉組織の発展と社会組織の変化」、満田氏は「Environmentalism as if people mattered」のテーマでレポート提出、報告をおこないました。

出席者数は日本と違い報告されませんでした。受付けて聞いたところ、事前登録者数は約六〇〇人とのことでした。報告、司会者数は三四〇人（プログラム記載による）、地元参加者を含めれば、登録者をかなり上廻る参加者があつたと思います。

報告者は、全世界九〇ヶ国に及んでおり、報告者のいない国をあわせれば一〇〇ヶ国には達していると思われる文字通り世界會議でした。社会主義国からもルーマニア、アルバニア、キューバ、インドシナ三国、北朝鮮を除く各国から参加報告しています。アジアからは、中国、韓国、台湾、フィリピン、タイ、スリランカ、インド、パキスタン、ネパール、バングラデシュ、イラン、トルコ、サウディアラビアが参加していました。フィリピン、インドからはそれぞれ一〇人が参加しています。

會議の共通課題は「食糧安全と農村開発―不確実性との闘い―」

でした。全体としては先進国では、「過剰問題」、「エコロジー」などが、途上国では、分配、欠乏、生産、開発等が問題になり、両者でかみ合わない面もありました。会議はテーマ別部会と自由報告部会に分れ、前者は今期間を通じて連続的に開催され、共通の問題について継続的に報告討議されました。テーマ部会は一八ありましたが、その内、一部をあげると次のようなものがあります。「経済変動―農業の階級構造」、「過剰生産」、「農村労働市場と労働組織」、「性役割の変動」、「環境資源の政治経済学」、「社会変動と外部介入」、「食糧危機」など。そのほかに会義の最初に、「家族農場の農業研究者」、「農村社会学における婦人の活動」など九つの共通関心ごとの部会に分れての研究者の相互交流のための自由討論の場もおかれていました。

婦人研究者のための交流の場が設けられたこと、農業における婦人の役割増大が多くの報告で語られたことは今回の会議のひとつの特徴だということです。食糧危機や、家族農場部会では研究者の真剣な討論が目立ちました。過剰生産部会で、アメリカとE.Cとの貿易マサツ問題がホットに論争されたのも印象的でした。

開会式講演の中で農業問題をめぐる現状に批判的な主張が述べられ、農民知識人と結合してシヴィル・ソサイエティの忍耐強い、持続的な変革のための運動、農村社会学の変革への貢献の必要性などが語られました。報告の中にも、現状批判的な報告がかなりみられました。アメリカの学者がプラクティカルであるのに対し、ヨーロッパは構造的、歴史的の違いもみられました。

私にとっては言語障害がありました。部会で原稿プリントが配られることも多いので、文字で理解できる部会を重点的に選択出席

しました。ただアメリカの若い研究者や一部の途上国の人々には、簡単な箇条書きレジュメですます人もいて困惑しました。途上国の人々は、一枚三〇円のコピー代金が負担だったということもあるようです。

会期中、アジアの人々が連絡をとりあい、七月三〇日夕刻より集まりをもちました。組織化したいという要望が強くあったのですが、私としては、コミュニケーション・ネットワークの形成を主張し、その通りになりました。後で中国、インドの高令の学者から、方針をサポートする言葉をもらいました。中国の研究者は友好第一を基本としていました。ネットワーク形成のための名簿に名前をのせたのは、一ヶ国二人です。国名は、インド、フィリピン、韓国、中国、パキスタン、タイ、台湾、バングラデシュ、インドネシア、ネパール、日本です。交流を深めるための努力をしなければならないのでしようが、なかなか難かしい問題もあります。アジアの研究者が一堂に集まり、交流したということで当面満足すべきかもしれません。

ただ、韓国ソウル大学のイン・ケン・ワン教授だけは、名簿に名乗せただけで会議に出席せず事情もよく知らないこともあり、また、本人がIRSA（世界農村社会会議）のアジア地区コミッティに選ばれたこともあり、組織化に大変に熱心です。すでに八月初めまでに五通の手紙が届き、日本と韓国が中心になって努力しようといってきたいます。しかし、ボローニアの会合での事情を伝え、当面は単なるコミュニケーション・ネットワークにとどめることを了解して頂いています。

痛感したのは、日本への期待が大きいかかわらず、日本から

の出席者があまりにも少ないことでした。ほかに日本人が殆んどいないので多くの人々が日本人かと話しかけてきました。アジアの集まりのためにも、なによりも日本を動かそうとしているのがみえました。同時に「日本はヨーロッパだ」というインドの一女性研究者の言葉にみられるような批判も大きいと思います。

日本の農業問題と欧米との関係で考えられることが多いのですが、もう少し途上国、とくにアジアとのかかわりの中で考えなければならぬこと、また、農業社会であり貧困に苦しむ途上国の農村に真剣な目を向ける必要があることを再認識しました。

現状のままでは日本の農村社会学はアジアのそして世界の孤児になるのではないかとも思いました。村研でも国際交流のための母体をつくっておく必要があるのではないのでしょうか。大会時に有志の方々に相談したいと思います。

新会長にはポロニア大学ジャンパオロ。カツテリ教授が選ばれました。次期大会開催地は未定ですが、カナダは引受けの用意があるということであり、中国も打診されているといえます。

楽しかったのは多くの国々の人々と交流できたことでした。会話ははが手ですが、一対一ですと、ひとつひとつ確認しながら進めるので何とかなりました。みんな交流のために来ているのですから直ぐ打ちとけることができます。会期中は毎日同伴の夫人たちのためにエクスカージョンがありました。また私達のためにも、三回あり、農村部の中世の領主館訪問パーティ、ポー川下流フェラーラ地方の農村見学、サン・マリーノ共和国訪問など殆んど無料で参加しました。語学のつたない私でさえ何とかなるのですから、次回からは村落の多くの方達が参加して頂きたいと思います。

会議後インドの友人たちとヴェニス訪問、次いでフロレンス、ローマ、パリと訪れ、パリ大学の歴史学教授と連絡をとりました。三週間の旅でした。機会を与えて頂いた村研の皆様に感謝します。

追記

世界農村社会学会議副会長スジオノ・M・P・トゥジツンドウロネゴロ氏や韓国のイウ・ケン・ワン氏らはASA（アジア農村社会学会議）の組織化を目指しているようです。次期世界農村社会学会議開催までの中間年一九九〇年にアジア農村社会学会議開催を考えているといえます。直接的働きかけはないので詳細は判りませんが、何かあつたら委員会にはたらにかけたいと思います。